
魔法少女リリカルなのは Magic-Breaker

謙信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Magic - Breaker

【Nコード】

N7619K

【作者名】

謙信

【あらすじ】

機動六課が解散してみんなそれぞれの道を歩んでいた。そんなとき最近になってとある騎士とある少女に会う。その少女はかつての自分の主と同じように車椅子に乗っていた。魔法少女リリカルなのはと他の作品とのクロス小説です。作者の独自設定や誤字脱字が多々あるかもしれませんが宜しく願います。

第零章 とある世界での顛末（前書き）

初投稿です。

はつきりいつて初心者です。

キャラ崩壊などがあるかもしれませんが。

更新も不定期です。

「Arcadia」様でも連載してます。

指摘や感想やアドバイスなどありましたらよろしく願います。

第零章 とある世界での顛末

昔戦争があつた。

誰もがどうして起こつたのかと問う。

しかしその問いに、本当の答えを言えるものはいない。

古来戦争が起きる理由など、さまざまだからである。

広い領土が欲しい。

権力が欲しい。

巨万の富を得たい。

自分の存在を誇示したい・・・等など

人は利で動き生きるもの。

これは自然なことである。

故に小さな争いや戦争が絶えないのである。

そついった利で始まつたとある世界の戦争が終結した。

その世界の民たちにその戦争の話を聞くと皆必ずこつ言つ。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

“ 賢者の石 ” が全ての始まりと。

<とある世界の和室>

《どうだあ？そっちは、相変わらず平和か？》

通信画面から右目部分に眼帯をした厳ついても渋いともいえる顔の男が

笑みを浮かべながらそう言う。

「平和すぎて退屈だよ。前線任務で指揮してた頃が、偶に懐かしく想える時があるほどにな。教官なんてやはり私には性に合わん、お前もそう思わないか？」

金髪の見た目10歳くらいの女の子が、片手にお茶が入った湯呑を持ち胡坐をかきながらそう言った。

《ハハハハっ、まあな。だがお前自身口じゃそう言ってるが、満更でもないって思ってるんだろ。それになんせ‘あいつ’から直々に頼まれた事だったしな。》

ニイっとなんは意地の悪い笑みを浮かべる。
そう言われた彼女は顔を赤くし男を睨む。

「っ．．．．！ 嫌いぞじじい！．．．．っ．．．．それで用件はなんだ？お前が自ら私に連絡をよこすからには余程の事なのだろう。

「
《あゝそれ、なんだが．．．．》

奥歯に何か詰まったような、男のはつきりしない言い方に彼女は疑問符？を浮かべる。

「なんだ？お前らしくもない、早く言わんか」

ずうーっつと湯呑のお茶を飲みながら彼女はそう言う。
男は片目を少し細めながら。

《．．．．．実は今朝方、あいつ、がミッドチルダに向かったらしんだが、お前知ってたか？》
「ぶうー．．．．．っ！？」

男の言葉に彼女は思いつ切りお茶を噴き出した。
ゲホゲホとむせながら。

「な、なんだとっ！？ わ、私は何も聞かされていないぞ！ お前はいつその事を知った！？」

《．．．ついさっきだ。シャインから連絡があつてな．．．．．
『勝手は重々承知してますが、心配はいりません』あの子の事は私に任せてください。責任はすべて私が持ちますから．．．．．
だ、そうだ、ハハハハっ、やられたな》

「笑ってる場合か！．．．あのガキ＼＃！．．．」

青筋を浮かべ怒りまくる彼女を見ながら男は肩を竦めて言った。

《そう怒るな。あいつ、は確りしてるし、シャインも一緒にいるんだ心配あるまい．．．．．それにどのみちあいつ、は中央議

会であの件に関し、ミッドに行く事になっていたんだ。早いか遅いかの違いだろう？」

「昨日決まったばかりだぞ！　しかも行くのは半年後の予定だったはずだ！　そもそも、私は‘あいつ’をあそこに行かせる事に納得などしていな《だからだろ》っ！？」

彼女の言葉を途中で男が止める。

《お前が納得しない事がわかってたから、誰にも言わずにすぐに向かったんだろ。向こうに行っちまえば（逃げたとも言っ）、お前から直々に止められずにすむからな．．．まあ、‘あいつ’のミッドチルダ行きに関して、納得してないのはお前だけじゃないがな．．．》

「．．．．．」

最後の方を苦笑しながら言った男のその言葉を聞き、彼女は少し逡巡し、目を細め。

「．．．．．お前は」

《ん？》

「お前は納得してるのか、いや、出来るのか‘スネーク’」

《．．．．フツ．．．．出来ると言えば嘘になるが、‘あいつ’が自分で決めた事だからな．．．他の誰でもない‘あいつ’自身が決めた事．．．俺ら老いばれば、あの歌姫の背中を偶に少しおすくらいで調度いいんじゃないか？　‘エヴァ’》

第零章 とある世界での顛末（後書き）

短い（；；）

次話で長く出来るようにしたい（汗）

自分の作るキャラは本物のようであまりありませんので。

（当たり前だけど（^^；））

次回「あいつ」登場します。一応主役です（たぶん）↑おい

第一章 始まりの朝（前書き）

やっと出来ました。
駄文ですがどうぞ。

第一章 始まりの朝

ザーッと雨が降っていた。

風は無く、ただ真っ直ぐに降っていた。

そんな雨の中、見つめ合い対峙する二人がいる。

一人は黒髪で、黒い東洋の礼服に陣羽織を羽織った高校生ぐらいの少年。

もう一人は腰まである長い銀髪で、白い修道服に甲冑を纏った中学生ぐらいの少女。

その少女の瞳の色は右目が青、左目が緑のオッドアイだった。

少年は手に何も持っていないが、少女は手に槍を持っていた。

赤い紅蓮の槍を。

少女はその槍の切っ先を少年に向ける。

「．．．．如何しても．．．行きますか？」

ザーッと降りつづける雨音の中を少し震えるような声が響いた。

少女の顔は、目は戦士の様な目付きでいて何故か泣いているように

見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少年はその声に、何の反応も示さずただ無表情だった。

そして、そのまま歩き出し少女の横を抜ける。

彼との間が少し空いた瞬間、少女は振り向き横を抜けた少年に槍の切っ先を向けながら、

「わたしは！ 諦めないからっ！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

周囲の雨音を掻き消すほどの声が響く。

しかし、その声にも少年は何の反応も示さず、そのまま歩き続け。

ゆっくりと少女の目の前から姿を消した。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・絶対に・・・・・・・・諦めないから・・・・・・・・」

ザーっと雨は降り続ける。

俯く少女の頬をつたい濡らし続けるのは雨水か、それとも涙か、或いは両方か。

そして、雨音がさらに増したと同時に、世界は晴れた。

「ミッドチルダとあるマンション」

「ん．．．．．ん．．．」

朝の日差しが顔を覆い、その光に起こされように彼女は目を覚ました。

蒲団から上半身を起こし、目を擦る。

そこで、ハタッと気づいた、自分が、' 泣いてる ' 事に。

「あ．．．そつか．．．夢、見たんだ．．．」

涙で少し濡れた手を見ながら彼女はそう言う。

「．．．．．こうやって偶に、夢の中でしか貴方に逢えないんですね」

寂しくもあり、嬉しくもあり、そんな複雑な感情を抱きながらも彼女は微笑んでそう呟く。

ふうっと息を吐き、枕元にある櫛で髪を梳かし、身体を起こして掛け布団を畳む。

その後彼女はピンと背筋を伸ばし、ベッドの上に膝をついて

両手を胸の前で祈るかたちに握り締め
朝のお祈りを始めるのだった。

祈り始めて少したった後、部屋にコンコンッとノックの音が響く。

『フィー、起きてますか？』

「あ、はい、起きてるよ」

『では、失礼しますね』

ガチャッとドアを開いて部屋に入ってきたのは
長い金髪で私服にエプロンをつけた女性だった。

「おはようございます。フィー。昨夜はよく眠れましたか？」

「うん、おはよう。シャイン。大丈夫、ぐっすり眠れたよ」

「そうですか。具合の方も良いみたいですね。」

けど、今日は外に出る時は必ず車椅子に乗って下さいね♪」

目をつぶり人差し指を立てて、微笑みながらそう言うシャインの姿は
まるで子供に釘を刺す母親そのものだった。

そう言われたフィーは少し頬を膨らませ、腰に手を当てながら言う。

「もうー、シャイン。私は子供じゃありません。それぐらい言われ
なくてもわかっています」

「ふふっ♪、ハイハイ、すみませんでした。それではフィー、お手
を．．．」

「はい。シャイン」

シャインがそう言った後、自分の掌を前に出し
続けてフィーも自分の掌を前に出してシャインの手と合わせる。

そして、二人とも目をつぶり

「「今日も光の加護と祝福があらんことを」」

綺麗で温かい、二人のその声が部屋に満ちた。

フィーは顔を洗った後部屋に戻り服を着替え白くて長い半袖ワンピースを着ている。

今はシャインと一緒に朝食の準備をしていて食卓に並べている。

献立はトーストにベーコンエッグ。サラダとヨーグルトだ。とてもシンプルなメニューなのだが、フィーのそこだけ違和感があった。

まずトーストが10枚、ベーコンエッグは皿ではなくトレイに山盛り、

サラダもヨーグルトも大皿に盛られていた。

シャインは普通なのだがフィーのは、はつきりいつて異常な量である。

全部並べ終え、二人は食卓につき手を合わせる。

「いただきます」

二人がそう言ったあとフィーは目の前の量の食事をゆっくりと上品に食べたず。

そんなフィーを見ながら同じく上品に食べるシャインは苦笑しながら

「・・・いつも思いますが、よく食べられますねその量を」

「食べる時はちゃんとしっかり食べないと、動きたい時に全力が出せませんから」

フィーは笑顔でそう言う。

それを聞いたシャインは嘆息する。

（やはり‘血’ですかね・・・コレまで似るとは）

「しかし、信仰者の一員として言うなら派手な大食は

なるべく控えて欲しいのですけどね」

「・・・う・・・善処します」

そう言ったあと手を口に当ててフフッと笑うシャインを見て
フィーは少し顔を赤くしながらもゆっくりと食事を再開する。

食事を済ませた二人は食後の紅茶を飲んでいた。
そこでシャインが話を切り出す。

「フィー。スネークさんには連絡を入れておきました」

「っ・・・そうですか。何か仰ってましたか？」

「いいえ、何も・・・あの方らしい見送りじゃないですか？きっと
」

「そう、ですね・・・」

「あ、それと一応、エヴァにも知らせておいて下さいと頼んでおき
ました」

「！」

それを聞いた瞬間。

フィーは一瞬目を見開き、すぐに不機嫌な顔に変わる。
そんなフィーを見てシャインは苦笑し嘆息する。

「もう、そんな顔しないで下さいよ。フィー」

「なら・・・あの『バカ師匠』の事は言わないでシャイン。
それと、余計な事はしないで」

完全に口調が変わりタメ口になっている。
かなりキテル事がわかる。

「全く、相変わらずですね。貴女たち師弟はその偶に
水と油になる所を治せば完璧なのですが」
「・・・・・・・・」

何も答えず沈黙するフィー。
シャインはそれにまた苦笑する。

「そんなにエヴァが納得いかない．．いえ、不満なのですか？」
「．．不満ですよ。いまだに私を子供扱いするんですから。
今度の事だつてあのバカ師匠が納得していれば．．」
「ふふつ、でもエヴァが師である事は尊敬して満足しているのでし
よう？」
「な！」

聞いた瞬間、顔を赤くするフィー。

「見ていればわかります。バカバカ言ってますけど、
ちゃんと‘師匠’とも言ってますから」
「ななな！何を言つて、私は不満だと．．」
「フィーの言う不満は満足と紙一重です。自分で判りませんか？」
「！！！」

シャインから止めの一言を喰らい
その後何も言い返せないフィーだった。

第一章 始まりの朝（後書き）

感想や指摘、アドバイスなどありましたらどうぞ。

第二章 騎士と姫の邂逅（前書き）

更新が遅れてすみません！！

色々試行錯誤してたら一週間以上も過ぎてた（TT）

それと今回は完全に自分の独自設定ならび他作品キャラも出ています。

そついうのが嫌いな方はご注意を。キャラ崩壊もしてるかもしれないません。

ではグダグダになっていない事を祈りつつ第二章どうぞ。

第二章 騎士と姫の邂逅

「とある世界 軍事海上都市 クイーン・アクア 『女王の海』 教導局隊舎 局長室」

「くしゅん！」

「あれー？どしたのエヴァちゃん。風邪？」

「っ・・・違う。只のくしゃみだ。私が風邪をひくわけなからう。」

「・・・それより朝倉、何度も言ってるがここでは局長と呼べ」

「えー。いーじゃん別に、二人しかいないんだしさ」

ニカツと笑いながら言う朝倉。

それを聞いたエヴァは顔を顰め嘆息する。

コイツは・・・と少し頭が痛くなる。

二人は今自分のデスクに座り、教導局の仕事に勤しんでいた。いつてもその殆んどは朝倉がやっているのだが。

「あ、ひょっとしたらさ、どっかの誰かがエヴァ『ギロっ！』・・・局長の噂でもしたのかも」

睨まれて途中苦笑しながらいい直す朝倉。

「フン。噂か・・・もしそうなら大方誰かは検討はつく」

「え、そうなの？だれだれ？」

朝倉にそう訊ねられたエヴァは顔を顰めながら。

「どうせあの‘アホ弟子’に決まっている。弟子で私に面と向かってはつきり物を言えるのは

アイツだけだ。きつと向こうで私の事を罵っているのだろう．．．

あのガキ．．．#」

「あゝなるほどねゝあはは、確かに．．．」

目を瞑り青筋を浮かべ不機嫌になるエヴァ。

すでにフィーがミッドチルダに行ってる事は伝わっている。それを聞いた朝倉は、乾いた笑みを浮かべながら納得した。

エヴァとフィーの師弟。

二人は犬猿の仲と言われるほどに仲が悪い。

その昔、とある事でキレたフィーはエヴァに真正面から『このバカチビ師匠が．．．っ！！#』と言って喧嘩を売った事があり、当然エヴァはそれを『上等だ！このクソガキ．．．っ！！#』と言いなからそのまま喧嘩よろしく戦闘^{死合い}になった事がある。

その後二人を止めたのはシャインで、その時のシャインの顔は聖母の様な笑顔なのに

眼が全く笑っておらず、ものすごい威圧感を出していたという。

流石に二人もこの威圧感に負け、床に正座させられ信仰者直伝の長ゝいお説教を聞かされたのだった。

エヴァはともかく同じ信仰者のフィーが正座で説教される場面はかなりアレである。

閑話休題

「でも意外だなー。局長ならすぐにも仕事なんかほっぽって、真つ先にフィーを追いかけると思ったのに．．．（まあ、それは副官の私が非常に困るから、出来れば止めて欲しいんだけどね．．．）」
「フン．．．それはアイツ一人だったらな．．．スネーク^{スネーク}の話だとシャインと一緒にいるからアイツの世話と護衛は完璧だろう。そして肝心なアイツの押さえ役もシャインなら充分だろうからな．．．それでもやはり納得は出来んが．．．」

最後、目を細めてエヴァはそう言っ
てデスクに置いてあるお茶が入った湯呑みを持ちずうーっとな音を立
てて飲む。

そんなエヴァを見ながら朝倉は顔をニヤニヤと歪ませて言う。

「そうだよな、大好きで可愛い弟子[♪]が見知らぬ所に行ってる
んだから心配も一塩だよな[♪]」

「ぶうーーーーっ?!」

朝倉の爆弾発言にエヴァはお茶を盛大に噴出す。

「おっ！ 凶星か、もうそれなら連絡すればいいのに[♪]」

勝手に調子に乗りまくる朝倉。

ゲホゲホと咽たあと、エヴァは顔を真っ赤にしなが

朝倉を睨んでデスクをバンツ！と叩き．．

「だれが！ あのガキの事が！ だ、だ、大好きだってーっ?!」

「あれ、大好きじゃないの?」

「ち、違っわっ!」

「ふーん。でも、心配はしてるんでしょ? 否定しなかったし」

にっと、してやつたりと笑う朝倉。

「んなつ?! ．．それは」

「それは?」

「っ．．．フン．．．少しな．．．」

ブイツと赤い顔を逸らしてエヴァはやつと素直に答える。

それに朝倉は苦笑する。

少しじゃないくせに、とそう思う。

「ねー、エヴァちゃん．．．」

「っ．．．なんだ?」

エヴァはまだ少し赤い顔を朝倉に向ける。

そして朝倉は目を細めて薄く笑いながら言う。

「エヴァちゃんだけじゃないんだよ。フィーの事で納得してないのは．．．」

「．．．．．」

「私も心配してるよ。行けるんならすぐにでも行きたいって思ってる．．．」

「．．．．．」

「けどさ。フィーが自分でなんとかしたいって一度思ったら即行動

するのはいつもの事じゃん。

それに今までだって何が遭っても必ず最後は笑顔で、私．．私達皆の所に帰ってきてくれた。

だからさ．．．今度もフィーはちゃんと笑顔で帰ってくるって、私達はそう信じてる．．．！」

パツと、満面の笑みで朝倉はそう言った。

それに何も言わずに黙って聞いていたエヴァは．．

「．．．プっ．．．ククク」

「．．．へ？」

「アハハハハハハハッ！！」

エヴァがいきなり盛大に笑い出す。

朝倉はそんなエヴァを見て目を点にして戸惑う。

「え、なに？どうしたの？」

「クククク！ い、いやなに、ちよつとな」

「ちよつと、て？ 私何か変なこと言った？」

「クク、つまらん事だ、気にするな。それより局長と呼べこのバカ者、フフ」

「??？」

笑いながら注意するエヴァを見て訳が分からず

朝倉は首を傾げて疑問符？を浮かべる。

（フ、全く．．．こいつらといると自分の歳を実感するだけじゃなく何年たっても

直せない自分のつまらん欠点にも気づかされる．．．お前もそうなのか？スネーク．．．）

エヴァが胸中で此処にはいない男に問いかけた時
アラーム音が部屋に響いた。

「あ、局長。千雨ちゃんから通信きてるよ」

「長谷川から？わかった。繋げる」

朝倉が操作し通信画面が展開した。

《おーす、局長。ちよつといいか？》

画面の向こうには海のような電子空間に浮かび
幾つものキーボードを器用に打ち込みながら
こちらに話しかける軍服姿の千雨がいた。

「なんだ長谷川、なにか用か？」

《あー、実は局長に直通でメール通信が来てんだけど・・・》
「私に直通でだと？誰からだ？」

そうエヴァに問われた千雨は少し逡巡したあと・・・

《・・・ウエストフィールド西界、シンラのルーファウス議長からだ》

その名を聞いた瞬間。

朝倉は驚愕と同時に顔を引き締める。

逆にエヴァは目を細めながら妖艶な笑みを浮かべる。

「ほお・・・あの小僧が私に一体何のようだ？」

「多分、フィーの事について、じゃないかな？」

《私もそう思うぞ。で、どうする？》

そう千雨に問われたエヴァはさらに笑みを深めながら答える。

「面白そうだ。長谷川、そのデータをこっちに回せ」

《いいの？》

「構わん、早くしろ」

《．．．了解》

千雨が操作し通信データが送られてくる。

そして画面が展開した。

それには．．．

《やあ。マクダウェル参謀久しぶりだね。

おっと、今は局長だったね。これは失礼した》

金髪の若い青年が不敵な笑みを浮かべていた。

「ミッドチルダ 首都クラナガン」

「あー暇だなあ。やっぱ一人じゃ退屈・・・」

そう街中をトボトボ歩きながら呟いたのは元機動六課スターズ分隊副隊長にして

守護騎士ヴォルケンリッターの一人、ヴィータである。

その彼女が何故一人でクラナガンに居るのかというと。

今日は教導の仕事の日程が午前で終わり、午後から非番になったためである。

最初ヴィータはそのまま午後も出るつもりだったのだが、同じ教導隊に所属するなのがこう言ったのである。

『偶には私もヴィータちゃんも少し息抜きしよっか』

それを聞いた瞬間。

ヴィータは自分の耳が一瞬おかしくなったかと思った。

あのマグロ見たいに泳ぎ続けなければ死んでしまうのと同じように毎日仕事しなければ生きられない様なのはからそんな言葉が出たからである。

そのあとヴィータがそんなようなことを言ったため、なのはとちよつと一悶着あったが。

そついった事で彼女は今一人クラナガンに居る。

さつきまでなのはとも一緒だったのだが

なのは自身個人的に寄りたい所があるとかで途中別れたのである。

まあ、そんなこんなで一人になってしまい

まだ昼飯食ってないしどつか適当な店で食うかな、なんて思ってた

時だった。

歩いている道の前方に車椅子に乗った少女を見つけた。

ヴィータはその少女の姿がかつてのはやてと重なって見えた。

すぐに目を擦ると元に戻っており、安堵の息は吐いたあと自嘲した。

昔のはやてとこの少女を重ねるなんて、と。

しかしヴィータは、その少女の様子がおかしいことに気付く。

よく見るとその少女の車椅子が路面の破損した溝にはまり込んでしま

身動きが取れないようだった。

すぐにヴィータは助けてあげようと思い

その少女に近付き話かけようとしたが、

瞬間、目を疑った。

彼女は足を地面につけて立とうとしているから。

「なっ?! おい! ちょっとまって!!」

「え? はわっ?!」

すぐにヴィータは少女の肩を横から掴み車椅子に再度座らせる。

腰まである長い銀髪の少女で歳はおそらくスバルより少し下。

背は自分より高く、はやてより頭一つ分小さい感じ。

白いワンピースを着ている。

そして、ヴィヴィオと同じオッドアイ。

吃驚しているその少女にヴィータは。

「馬鹿っ！ 無茶すんじゃないよ！」

「えっ？！ あ、その、えと．．．」

少女はいきなり座らされそして怒鳴られてかなり困惑する。
無理も無いが。

だが今のヴィータはそれどころじゃなかった。

「周りをよく見ろ！ 人がいるんだから誰かに助けてもらうなりなんなりすればいいだろうが！」

「あ．．．．．」

「おい、聞いてんのか？」

「えっ？！ あ、うん！ その．．．すみません？」

「．．．なんで疑問系なんだよ」

「あ、えつと．．．多分、貴女は私が立とうとしたから止めたんですよね？」

少女はやつと困惑から解放されたのか、
少し落ち着きながら話す。

「あ？ そうだよ。車椅子に乗ってる奴がいきなり目の前で一人で立とうとすれば誰でも止めるぞ」

「やっぱり．．．」

少女は起こった事の現状を理解して少し困った顔をする。

「なんだよ？ やっぱりって？」

「えと．．．私、車椅子に乗ってはいまずけど、その．．．」
「？」

「普通に立ってるんです、けど．．．」

「．．．．．え？」

ヴィータは少女の言葉が一瞬理解出来ず目を点にする。
そんなヴィータに構わず少女は続けて言う。

「私は生まれつき身体が少し弱くて、外に出る時だけはなるべく車椅子に乗るようにしてゐるんです。

ですから、足は悪くありませんし立って歩く事も出来るん、です、けど．．．」

「．．．．．」

「あ、あのー？」

少女は今の話を聞いて石の様に固まっているヴィータに苦笑しながら問いかける。

そしてやっと現状を理解したヴィータは。

顔をボンっ！と音をたてて真っ赤にし、俯きながら。

「わ、わりい．．．アタシ．．．か、勘違いして」

「え、そんな、良いですよ。謝らないで下さい」

「うう．．．けどいきなり怒鳴っちゃったし」

「知らなかったんですから仕方ない事ですよ。」

それに貴女は私を心配して言ってくれた」

ですから．．．と言って少女は手を伸ばしヴィータの手を取り両手で優しく握る。

「貴女がやった事は正しいです。だからそんな顔しないで」

少女はとても穏やかで暖かい微笑みでそう言った。

「あ．．．．．」

ヴィータは一瞬、その少女の微笑が昔のはやての笑顔と重なって見えた。

「ハ！ あ、その、わかった。じゃあさ、立てるんならその車椅子を溝から出すの一緒に手伝うって事でチャラにしねえ」

少女の笑顔で気持ち が和らいだヴィータがそう言う。
少女もそれを聞いて笑顔のまま頷き。

「はい」それでいいですよ。むしろ助かります」
「よし。わかった。じゃあ、えっと・・・」

ヴィータが少女をどう呼べば言いか迷っている。
それに少女は気づき応える。
そして、

「あ、私はフィクス。フィクス・ラア・アーシュライト。
貴女が良ければフィーと呼んで下さい。知ってる方は皆そう呼ぶので」

「おう。アタシはヴィータ。アタシも呼び捨てでいいからな。よろしくな。フィー」

「はい！こちらこそよろしくお願いします。ヴィータ」

フィーとヴィータ。

歌姫と騎士。

これが二人の初めての出会いにして思い出。
ここから長い物語が始まる。

第二章 騎士と姫の邂逅（後書き）

どうですか？

面白かったのなら僥倖です。

指摘や感想やアドバイスなどありましたらよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7619k/>

魔法少女リリカルなのは Magic-Breaker

2011年10月6日18時04分発行